

連載

第136回 視聴者は5秒間、 考えてわからなかったら チャンネルを変える

東京大学 中尾 政之*

*なかお まさゆき：博士(工学)。東京大学大学院工学系研究科教授。1983年、東京大学大学院卒業後、日立金属に入社。HMT Technology Corp.を経て、1992年東京大学大学院工学系研究科助教授、2001年教授に就任。2010年4月から同大学産業機械工学専攻 専攻長を務める。著書に「失敗百選」(森北出版)、「創造はシステムである」(角川書店)など多数。



久しぶりにテレビに出た

2021年6月5日、日本テレビの「世界一受けたい授業」に出演した。前回はいつだったか忘れたが、この16年の長寿番組に対して、筆者は5回目の出演となるらしい。だからなのか、放映1週間前の収録でも、緊張感はまったくなし。当然、台本を渡されても、セリフを5度、声に出して読んでくだけで、「あとはカンペ(カンニングペーパー)任せでいいや」と開き直っていた。

バラエティ番組は、出演者を台本で縛らずに芸人を「泳がす」という作戦をとる。欲しいのは、想定外のおもしろさである。だから、芸人の面々は、台本を無視して自分に注目が集まるように勝手にしゃべり始める。制作会社も番組時間の2倍から3倍の時間をかけて皆を泳がせ、その中から適当におもしろいところをカットしてつなげる。だから、ゲストが台本を真面目に暗記してもあまり意味がない。司会の74歳の堺正章さんのカンペは文字が大きかったが、さすがにプロだけあって、政治家のようにそれを棒読みしている感じはまったくなかった。

と言いながらも、あまりに台本から脱線すると、本番の後に居残りし再収録を課される。今回も3つの文章を再収録させられたが、声の調子が異なるので、つなげたことは放映時すぐにばれた。例えば、「取扱説明書に従ってください」という注意は、事故を防ぐためにあまり意味がない。「事故が起きないように設計すべきだ」に変えようとディレクターに何度も懇願したが、「消費者は使用前に取扱説明書は熟読すべきである」というマスコミの教条主義の失敗学には勝てないらしい。本番でその一文を無視したら、再収録で「カンペ

のここを読んでください」と言われ、「取扱説明書に従ってください」とふてくされて棒読みした。

つまり、バラエティ番組は生放送ではないので、結構、カットアンドペースト的な一品生産方式を採用している。想定外の笑いや驚きを求めて、台本を越えて自由に走りながら余裕をもって収録し、後で作品を仕上げる。失敗を恐れていたなら何もできない。一方で、エンジニアは図面とニラメッコして、つくる前に構想を練り上げ、図面通り、計画通りにモノをつくる。万が一にも「買って使ったら燃えた」では人生最大の失敗になる。同じ生産といっても、世界が大きく異なる。

もちろん、図面と等価である台本がいい加減なわけではない。結構、計算し尽くされている。くりいむしちゅーの有田哲平さんはボケ担当で話を脱線させて笑いを取っていたが、即興ではなく、話の筋は台本通りである。今年はコロナ禍なので、教師役のゲストと生徒役の芸人の数を2/3に減らし、ビデオであらかじめ収録した部分を多くしたそうである。筆者は失敗学を担当したが、ビデオの内容は秀逸であった。国民生活センターや製品評価技術基盤機構の実験映像を借りてきて、わかりやすく編集している。やたらと爆発が多かった。視聴者は、事故原因よりも爆発の音や火炎の噴出に対して非常に驚く。

制作会社のディレクターの林真央さんが優秀だった。この番組は、4つの制作会社が順繰りに、毎週土曜日放映の1時間番組をつくっている。日テレは電波管理会社だから、創造性は制作会社の人材が生み出している。もちろん、番組立上げのときは、日テレのプロデューサーの創造性も必要だったと思う。しかし、16年間も同じキャストで